

浅草と隅田川

隅田川は東京を通過して東京湾に注ぐ全長 27km の水路です。近隣の埼玉県から流れる荒川の元々の流れを辿っています。20 世紀初頭、洪水を予防するために荒川本流の流れを迂回させようと、水路が作られました。1965 年に、この小さな水路は隅田川と名付けられました。浅草が位置する台東区は、この川が流れる 6 つの区のひとつです。隅田川は、浅草地域を江戸（現在の東京）の信仰の中心、そして地域経済の重要なハブとして確立させ、浅草の発展と歴史に欠かすことのできない役割を果たしました。隅田川は浅草の住民の故郷の象徴となりました。

浅草は昔小さな村に過ぎない所であり、当時は浅草川、または宮戸川と呼ばれた川は、豊かな漁場でした。言い伝えによると、628 年に、2 人の漁師、檜前浜成と竹成の兄弟が網を川から引き上げると、仏教の哀れみの女神、観音菩薩の金の像を見つけ、この兄弟は土師中知という名前の村の賢人と一緒に浅草寺を創建し、像を安置しました。

江戸時代（1603 年 - 1867 年）に初代将軍の徳川家康が日本の首都を江戸に遷都すると、浅草は急速に発展していきました。川は建築用としての需要が高かった材木の航路でした。浅草は、江戸への自然の玄関口で、多くの人々はこのルートで船に乗って江戸を訪れていました。通行量の増加は、商業の才覚のある商店にとって大量の顧客を意味し、それにより浅草寺の仲見世が生まれました。特に、北西に位置する現在の埼玉県の川越産のサツマイモから作られた軽食や甘いお菓子など、ここで販売されていた食品の多くも隅田川経由で江戸に輸送されていました。浅草は、劇場、料亭、吉原遊郭の芸者の置屋などを含む繁華街としても発展しました。常連客は、ひっそりと歓楽街を楽しむための玄関口として隅田川を利用していました。

浅草のすぐ横を流れる川はまた、長年にわたって芸術に大きな影響を及ぼしてきました。葛飾北斎（1760 年-1849 年）や歌川広重（1797 年-1858 年）の木版画で不朽の名声を得ただけでなく、今戸焼という地元特有の陶器もこの地域の名産物となりました。また、隅田川は、歌舞伎と能の双方に登場し、そのうちのひとつからはイギリスの作曲家、ベンジャミン・ブリティン（1913 年-1976 年）がヒントを得てカーリユー・リヴァーというオペラを書きました。

この水路は、現在でも未だ浅草の芸術や文化イベントに重要な役割を果たしています。毎年開催される隅田川花火大会は、ろうそくで灯された紙製の灯籠に個人がそれぞれ祈りを書き、水面に浮かべて下流へと流す、浅草のとうろう流しという 8 月に開催されるイベントと同様に東京屈指のイベントのひとつです。春先には、川の両岸沿いの多くの桜が花を咲かせ、5 月には色鮮やかな鯉のぼりが風になびきます。観光客は、1 年を通じて、水上タクシーや遊覧船を貸し切りにして、隅田川にかかる 26 の橋の多くの下を通過し、東京スカイツリーなどの東京で注目に値する素晴らしい建築物のいくつかを見ることができます。